多摩川台公園の古墳群

発行　平成17年10月
大田区教育委員会
大田区立郷土博物館
大田区南馬込5－11－13
TEL　03－3777－1070
Fax　03－3777－1283

【古墳と田園調布古墳群】

古墳の造られた時代は、日本が国家として形成された時代です。3世紀後半から7世紀末までのおよそ450年の間に、北海道・東北北部と南西諸島を除く日本列島の各地に、巨大な前方後円墳をはじめとする、さまざまな古墳が数多く築造されました。

多摩川下流域左岸の大田区田園調布から世田谷区野毛の地域には、古代の南武蔵を物語る50基程からなる古墳群がありました。この古墳群は、大田区側を「田園調布古墳群」、世田谷区側を「野毛古墳群」と呼び、合わせて「荏原台古墳群」と呼ばれています。

田園調布古墳群の特徴は、宝莱山古墳をはじめとする前方後円墳が多く造られ、多摩川台1号墳など横穴式石室をもつ後期古墳も多いことがあげられます。これらのことは、田園調布周辺が新しい文化や技術をいち早く導入したことがわかり、南武蔵の古墳時代を語る上で重要な地域であるといえます。

【公園内の古墳案内】

公園内には、4世紀から7世紀に造られた古墳が10基点在しています。園内の南の湿生植物園側から亀甲山古墳、その西側に連なる8基の小山が多摩川台古墳群です。南の1号墳から北の7号墳までは虹橋の手前にあり、虹橋を渡った左側の小山が8号墳です。園内の一番北側には、宝莱山古墳があります。

この公園内にある古墳群は、かつて都内に存在した古墳群の多くが都市化の波に埋もれてしまった中で、往時の姿をとどめている大変貴重な古墳群です。

公園内には、田園調布周辺の古墳から発掘された出土品をわかりやすく解説した古墳展示室が、公園管理事務所に併設されています。

所在地　大田区田園調布1-63-1
開室時間　午前9時～午後4時30分
休室日　月曜日（休日の場合は開室）・年末年始

多摩川上空から見た多摩川台公園内の古墳群（中央の森が多摩川台公園）

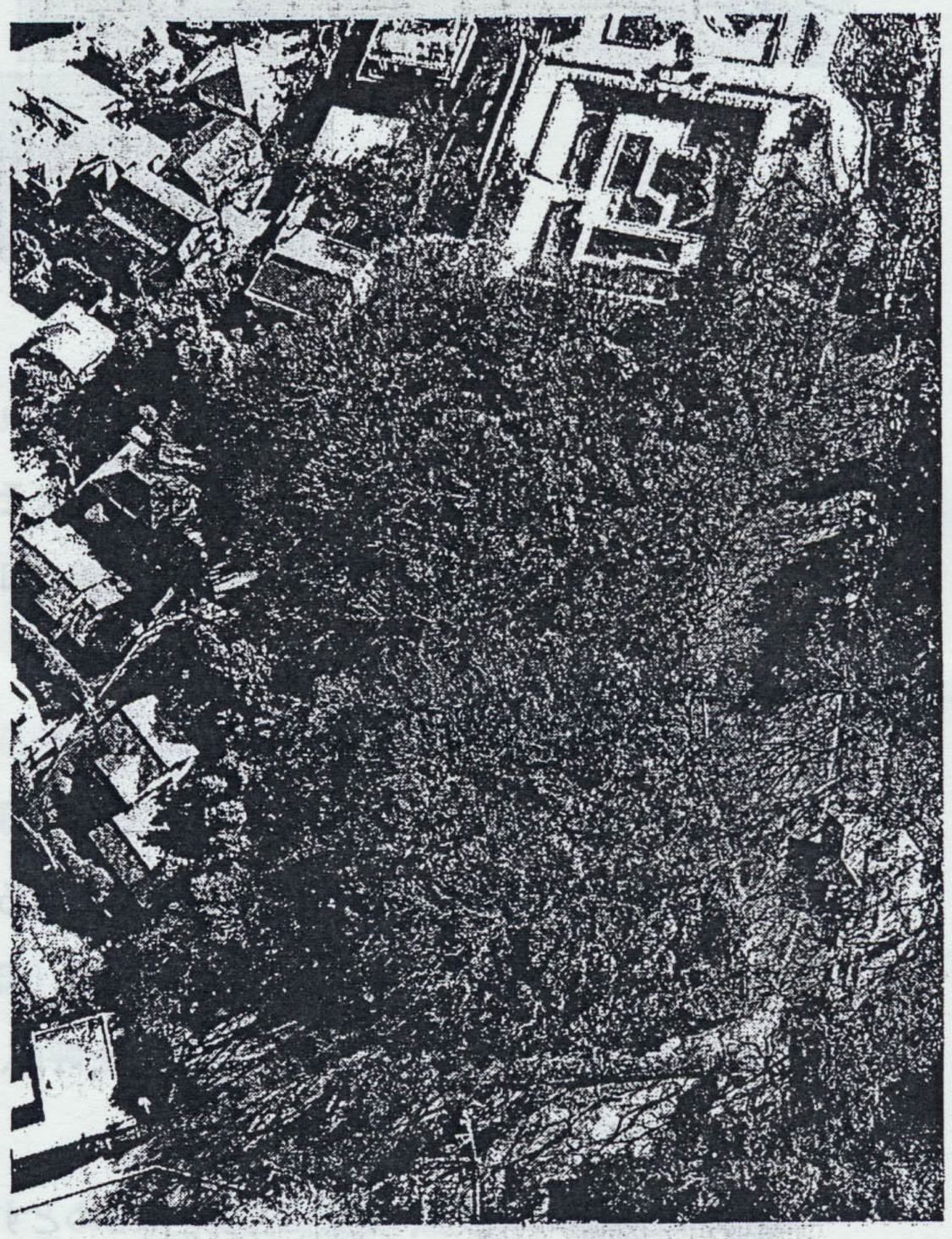
（1）亀甲山古墳（かめのこやまこふん）

～国指定史跡～　昭和３年２月７日指定

東京都を代表する前方後円墳の一つで、多摩川流域最大の前方後円墳でもあります。この古墳は、前方部と後円部の一部が削平されていますが、旧状はよく残っています。

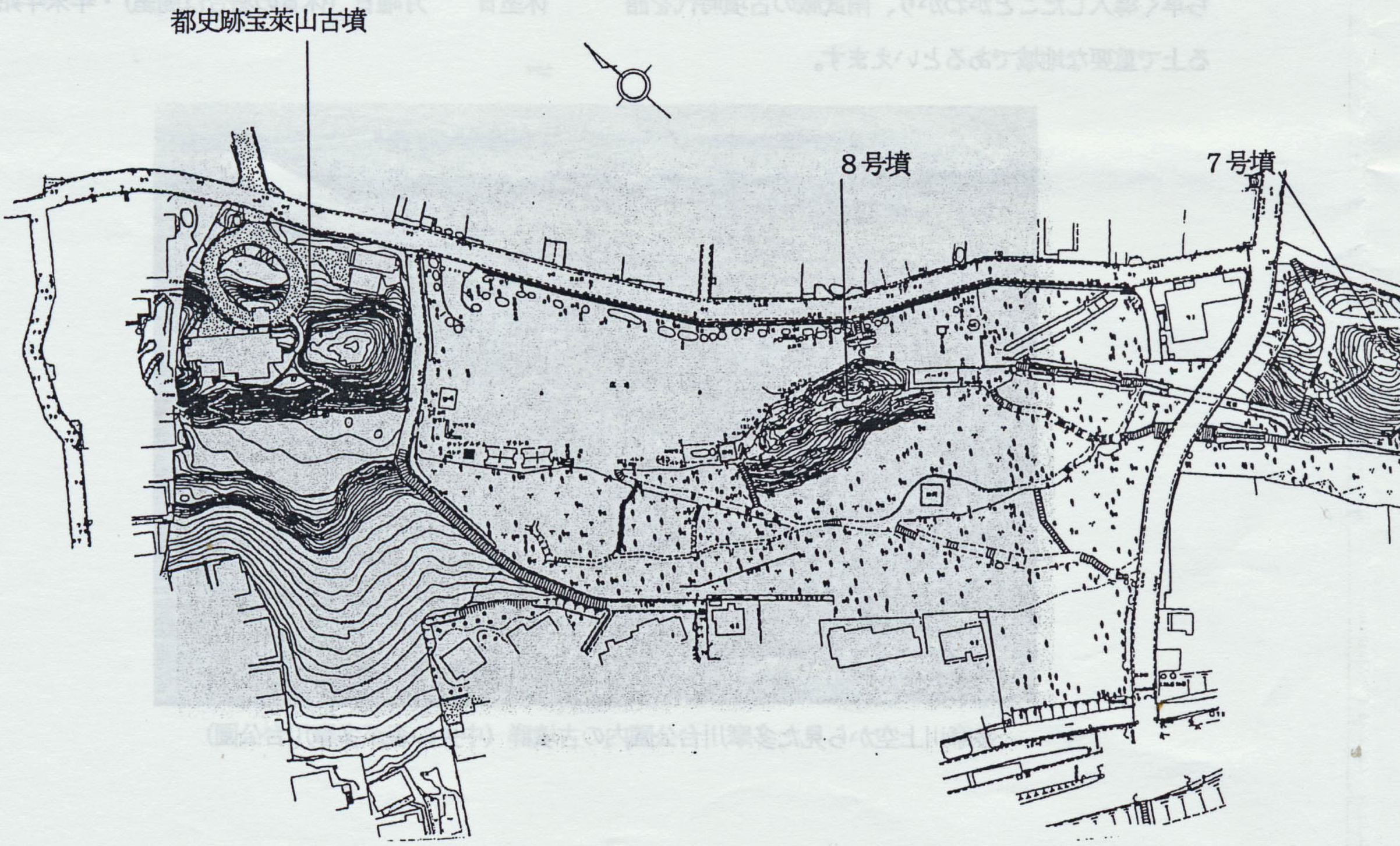
測量調査から、築造当時の規模は墳丘長 107.25m、前方部幅 49.5m、後円部径 66m、前方部高 7.63m、後円部高 11.75mであり、墳丘の途中に一段の平坦面を設けた二段築成であったと推定されています。

発掘調査が行われていないため出土遺物がなく、正確な築造年代は不明です。しかしながら、前方部平面形が４世紀前半に造られたと推定されている宝萊山古墳（前方後円墳、（３）参照）の前方部より、やや開く新しい形態から、宝萊山古墳の次に築造された４世紀後半の首長墓と考えられます。



亀甲山古墳全景（前方部上空から）

多摩川台公園内の古墳群



（2）多摩川台古墳群（たまがわだいこふんぐん）

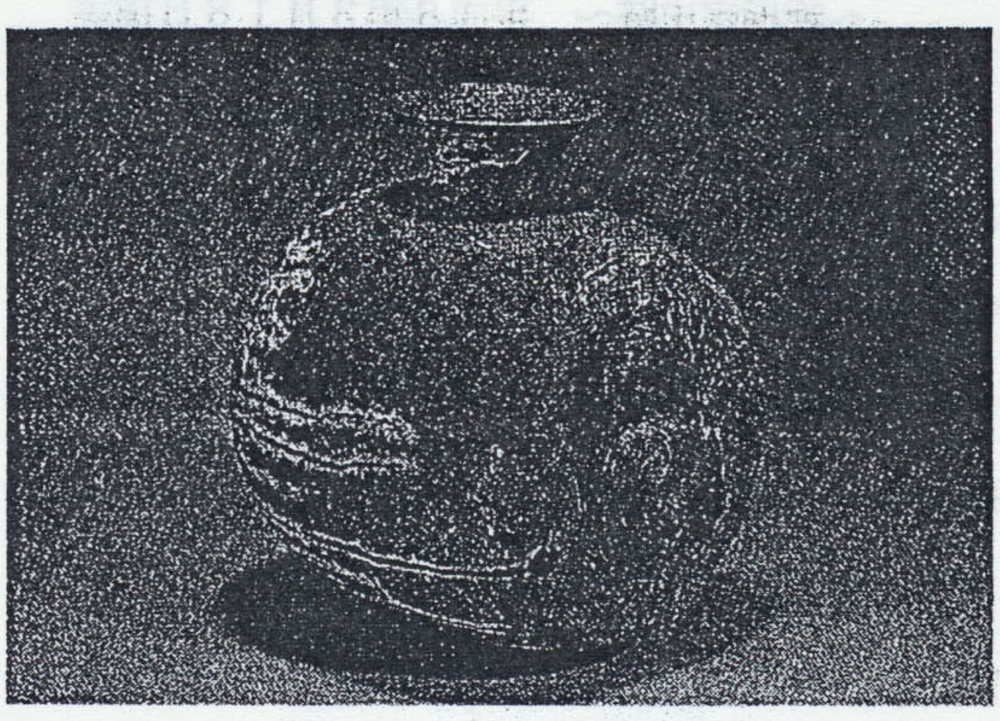
～都指定史跡～　平成１２年３月１６日指定

亀甲山古墳と宝莱山古墳の間に築造された８基からなる古墳時代後期の古墳群です。

昭和32～33年（1957～58）と昭和62年～平成３年（1987～91）に行われた発掘調査から、前方後円墳１基と７基の円墳群からなる古墳群であると確認されました。古墳の造られた順序は、円墳の２号墳が６世紀前半に、２号墳を前方部に利用した前方後円墳の１号墳（全長39m、前方部幅17m、後円部径19.5m、横穴式石室）が６世紀後半に築造されました。続いて６世紀末から７世紀前半にかけて３・４・５・６・７号墳が造られました。最後に８号墳が７世紀中頃に造られ、これで古墳群の築造は終了します。円墳の規模は、直径14m～20m内外と小規模です。

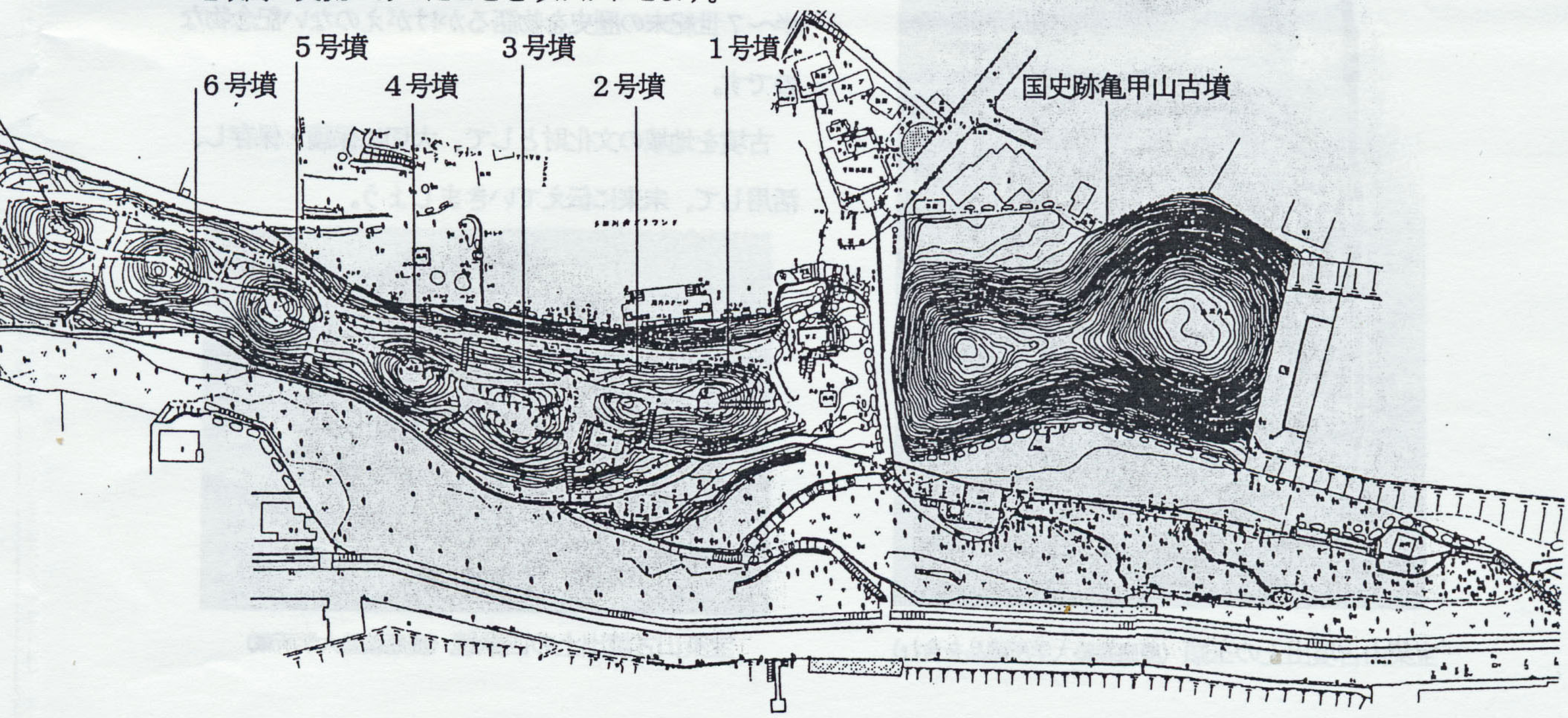
横穴式石室からは、副葬品は直刀、鉄鏃等の武器、耳飾り、管玉等の装身具、馬具の轡、須恵器、土師器が発見されています。

また、１号墳の埴輪と須恵器を胎土分析した結果、埴輪は埼玉県「生出塚埴輪窯跡」、須恵器は大阪府「陶邑古窯跡群」で生産されたと推定されました。このことは、埴輪や須恵器が遠い生産地から運ばれており、地域間の交流のあったことをうかがわせます。



多摩川台１号墳出土の須恵器

多摩川台１号墳出土の円筒埴輪



（3）宝莱山古墳（ほうらいさんこふん）

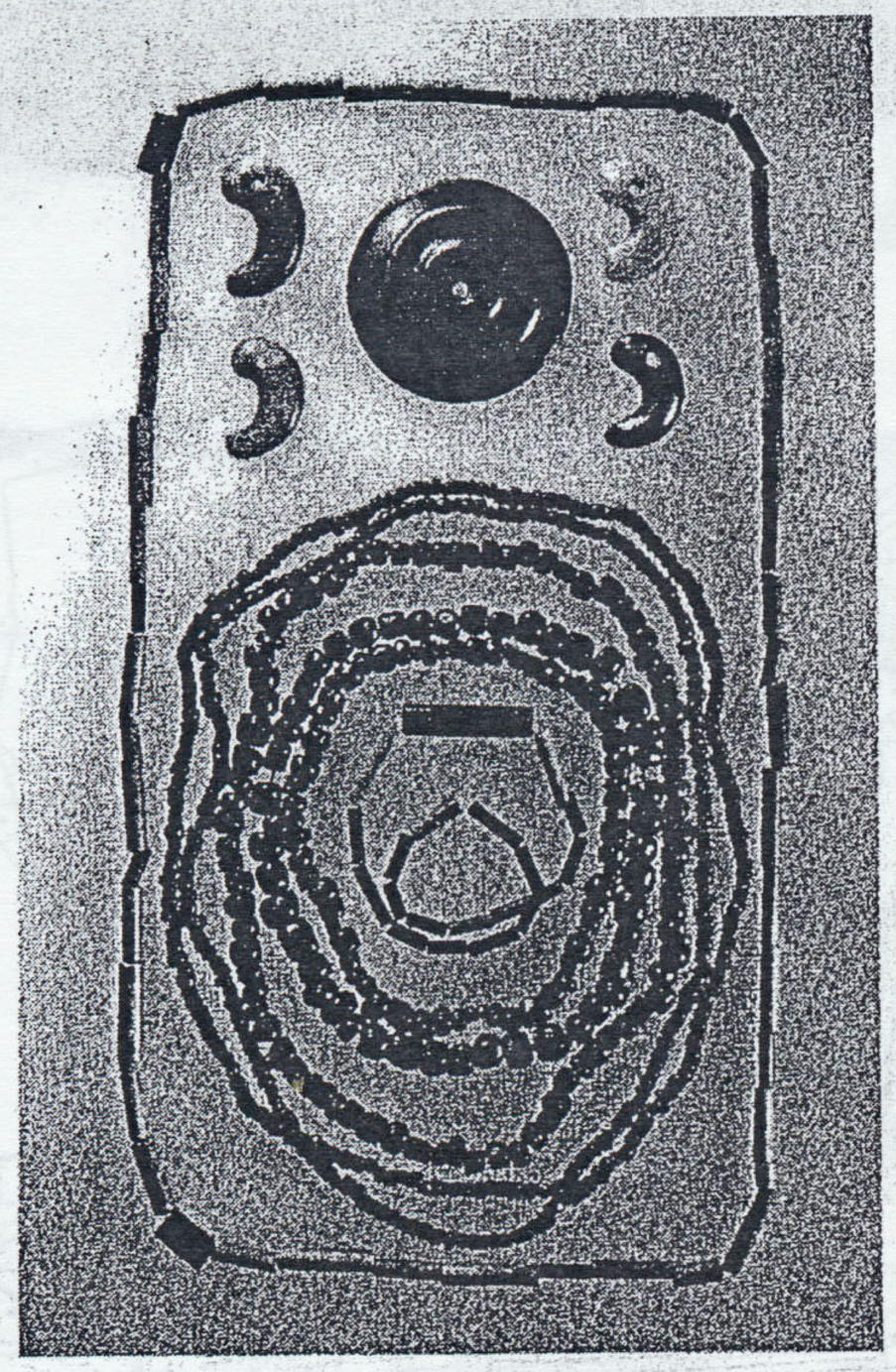
～都指定史跡～　平成８年３月１８日指定

昭和９年（1934）、宅地造成の時に後円部の３分の２が削平されました。しかし、前方部を含めた残存部は、今日も良好な形状を保っています。

後円部が削平された折に、墳頂下３ｍから被葬者を納めた木棺を覆っていた粘土槨が発見され、その中から国産の四獣鏡、碧玉製石製品、硬玉製勾玉、ガラス製小玉、鉄剣、直刀などの副葬品が出土しました。

平成７～８年（1995～96）の発掘調査から、築造当時の墳丘長は97.5m、前方部幅37m、前方部高８ｍ、後円部径52m、後円部高11mの規模で、築造方法は、前方部二段・後円部三段の築成であったことが明らかにされました。

また、発掘調査では、前方部の平面形が最古とされる三味線のバチ形に似ていることが確認されました。さらに、出土した土器と昭和９年の出土品から、４世紀前半に遡る関東地方でも最古の前方後円墳の一つと考えられ、多摩川流域で最初に出現した首長墓です。



宝莱山古墳出土の玉類（慶應義塾大学所蔵品を含む）

【古墳と文化財】

古墳は、普通の遺跡と異なり、小山のように盛り上がっているため、一般的にわかりやすいものです。

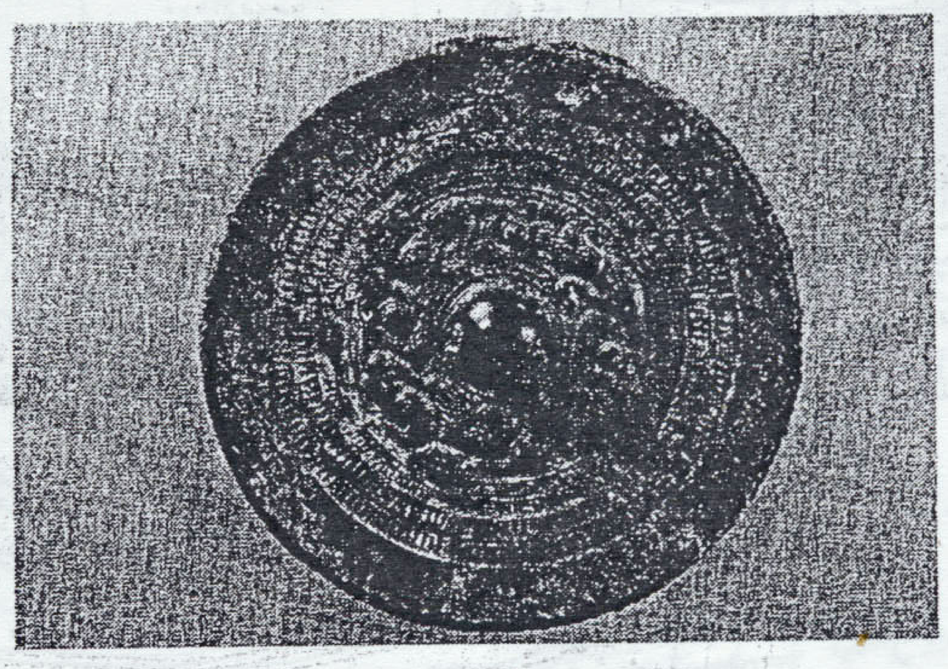
古墳は、少数の人々のために多くの人々を動員して造られ、副葬品は一人の被葬者のために手間暇かけて極めて豪華で精巧に製作されました。

古墳に葬られた首長は、彼らの権威と地位を固めるために、大和政権に従属を誓い、地域の首長として承認を得なければなりませんでした。その代償として特産品や、大和政権の指定された手工業製品の生産と貢納、巨大古墳築造等への労役奉仕、軍兵の派遣などを求められたのです。それを実際負担したのは、首長配下の人々でした。それに対して、大和政権からは、地域の首長を通して新しい文化や技術が人々に伝えられました。

このように、古墳は墓制を通して、当時の社会のしくみや、その生活の一端を見ることができるのです。

ところで、この時代の日本には歴史書がなく、社会の様子が全く記録されておりません。中国の歴史書でさえも３世紀の「魏志倭人伝」、５世紀の「宋書」に日本の記録がわずかに記されているに過ぎず、４世紀にいたっては、全く記録されていません。ですから、古墳は、日本が国家として形成されつつあった３世紀後半～７世紀末の歴史を物語るかけがえのない記念物なのです。

古墳を地域の文化財として、大切に保護・保存し、活用して、未来に伝えていきましょう。



宝莱山古墳出土の四獣鏡（慶應義塾大学所蔵）